

今回、派遣にあたっての集まりのなかで示された“Look before you leap”という諺から、私は事前学習の例をもとに事前に「備える」ことから得られるものについて考えた。

例えば、この派遣に私が参加した理由の一つは、海外の大学ではどのような教育が行われているか日本と比較しつつ経験したいということであった。そのため私は準備において複数のテーマを設定するにあたり、始めに教育という観点からマレーシアを知りたいと考えた。そして日本とは大きく異なる社会・教育の事情を知ることとなった。留学というキーワードをめぐる特徴では、マレーシアの大学ではトランスナショナル教育が直接的な海外留学以外の手段として比較的早くから浸透しているという。なお、こうした流れをさらに加速させる動きとして、近年世界ではネットを利用した MOOC (massive open online course) が浸透しつつあり、いわゆる従来からの留学以外の選択肢として可能性が認められつつある。私はこれらの動向を踏まえ、多様化する学習手段をマレーシアの学生はどのようにとらえるか関心を持った。特に今回はマレーシアからも学生が日本を訪れることになっており、あえてこのプログラムで日本に足を運ぶことを選んだのは何故なのかについても意見を聞きたいと思う。個人の考えとしては、学習という点に関して言えば MOOC は大変効率的で画期的なシステムであると思う。しかし、一方で学生はいずれ社会の構成員として仕事をしていくことになる存在である。自分の社会的背景に影響された狭い視野を矯正することもなく社会にでても、世界規模で変動する昨今の社会状況に直ちに対応できるとは私には想像しがたい。マレーシアの学生は新しい流れに対してどのような意見を持っているのだろうか？当初は自分が現地で体験できることが重要と考えていたが、今はむしろこうしたことについて同じプログラムを通じて知り合う大学生同士だからこそできる意見交換をしていきたいと感じている。

私は今回のような場合に、事前学習により不完全ながらも知識を蓄えることは、実物に対する視点を多角化する予備訓練になると考える。渡航に際しては、最初から知識を詰め込んでいくのはもったいない、余計な先入観を持たずによく観察するほうが斬新なとらえ方ができる、という意見もあるだろう。だが実際に海外で直面するのは、歴史・政治・文化・教育を含めた、時間的に広がりを持つ社会の表層のみであり、何もない状態でそこから様々な問題に気づくようになるには相当な滞在時間を要する。特に時間軸と密接に関係のある近現代史についてさえも今回のような短期派遣の場合は、現地で簡単に学習できるものではない。さらに歴史に関して言えば私たちのような一般に理系と言われる分野に関わる人間の場合、多くは知識が概略的でその重要性に対する意識も低いままになっているのが現状である。一方、現代社会に目をむければそうした理工系出身者が自分の技術を提供するのはこうした時代の影響を受けつつ存在する共同体であり、この認識と実態の差は時として社会に必要とされる技術を提供できるかという重要な一点における成否を左右するのに十分な要因となりうる。

安定した日本社会のなかで生活できることにより受けてきた恩恵は計り知れないと思う反面、私は日常生活にとどまっているばかりでは、必要なスキルを身に着けることはできても異なる社会・文化構造に対する対応力を訓練する経験が乏しいままだと感じる。例えば私にとってはマレーシアのような多民族国家の実態など、専門分野外ではあるが、将来的に自分が直面する可能性のある世界各地の時間的広がりや伴う問題への考察は生じにくいと思う。現在のように国際社会での出来事がリアルタイムかつ容易に閲覧できる時代であっても、私たち日本の大学生は一度短期的な目的を持って異なる社会を体験することにより、自主的な学習と、現地で学習から得た知識の整合性に関する検証やさらなる考察といった一連の訓練を積むことができるのではないだろうか。